

# 18-9世紀アムド・レブコン地方におけるニンマ派の発展

## —特にチエヤン・トゥプデンドルジイの教学を中心に—

ソウナム・ワンジェ

### はじめに

日本におけるニンマ派研究としては、平松敏雄による『トウカン『一切宗義』ニンマ派の章』の訳注（平松 1982）をはじめ、少なからざる蓄積があるが、埋蔵經（gTer chos）、ニンマタントラ（rNying ma rgyud 'bum）、中国禪がゾクチェンに与えた影響など、一部の分野が取り組まれているにとどまり、教学面では、ニンマ派の歴代の学者たちが、ゾクチェンをどのように扱い、位置づけていたか、発展史では、ニンマ派がチベット（その他のチベット仏教圏）においてどの要に発展したかなどについて、具体的に、あるいは体系的に紹介する作業はいまだ十分に行われてはいない。本稿が扱うアムド地域におけるニンマ派、レブコン地方における仏教（ニンマ派およびその他の宗派）の展開も、従来の研究では空白となっているテーマである。ただし、このテーマのために利用しうる史料は、同地出身者の著述を主として多数存在しているので、本稿では、それらの史料を紹介し、かつ依拠しつつ、標題のテーマに関して論をすすめたい。

### 1 レブコン地方におけるニンマ派の発展史

#### 1.1 チベット全土において著名となったレブコン出身の高僧

14世紀以降、チベット東北部のアムド地方では仏教諸派の活動が活発となり、チベット全土で活躍する宗教家たちが多数あらわれるようになった。なかでもレブコン地方は、特に名だたる高僧を輩出した地域である。たとえば、アムドの古寺のひとつシャチョン僧院（Bya khyong dgon pa）を建立（1346年）し、ゲルク派の祖師、ツォンカパ自身に沙弥戒を受けた親教師であり、ブトゥンから「東方の学問の勇者（RGD, 105）」と呼ばれたチエジエ・トンドウプリンчен（Chos rje Don grub rin chen, 1309–1385）、ゲルク派ロンボ大僧院の開山者ヒャル・カーデンジャムツォ（Shar sKal ldan rgya mtsho, 1607–1677）、ジャムヤンシェパ三世ジグメージャムツォ（'Jam dpyangs bzhad pa 'Jigs med rgya mtsho, 1762–1836）、あるいはチベットではじめて各種の近代的学問を学び実践した大学者であり、「チベットの人文主義先駆者」とまで評される<sup>(1)</sup>ドタク・ゲンドウンチュンペー（rDo brag dGe 'dun chos 'pel, 1903–1951）等がいる。

## —18-9世紀アムド・レブコン地方におけるニンマ派の発展—

## 1.2 レブコン・ニンマ派における著名な弘法者 5 名

以上は主としてゲルク派に属する人物であるが、「古派」と自称するニンマ派の場合、17世紀から19世紀にかけて、リンジン・ホエデンタヒー (Rig 'dzin dPal ldan bkra shis, 1688–1742)、ホエチン・ナムカージグメ (dPal chen Nam mkha' 'jigs med, 1687–1746)、チエジエ・ナガントルジエ (Chos rgyal Ngag dbang dar rje<sup>(2)</sup>, 1740–1807)、チエヤン・トウプデンドルジイ (Chos dbyings sTobs ldan rdo rje, 1785–1848)、シャプカル・ツォードゥクランドウル (Zhabs dkar Tshogs drug rang grol, 1781–1851) の5名が相次いであらわれて、レブコン・ガマン<sup>(3)</sup>というニンマ派的一大教団をつくりあげた。本節では、彼らの教学の分析を通じてアムド・レブコン地方におけるニンマ派の発展を概観する。

## 1.3 4名に関する資料

管見の限りでは、上記のニンマ派弘法者5名に関する学術的研究はいまだに存在しない。伝統的形式で執筆された伝記資料としては、新旧とりまして、タクゴンパ・コンチョクテンパラブジエ (Drag dgon pa dKon mchog bstan pa rab rgyas, 1801–1866) の『ドマー・チエンジュン』(1865, 以下 DG)<sup>(4)</sup>、ニンシューケンボ・ジャムヤンドルジエ (sNyin zhu mkhan po 'Jam dbyangs rdo rje, 1932–2000) の『ゾクチエン持明師伝・青宝珠』(2002, 以下 VPh)、ケツンサンボ (mKhas btsun bzang po) の『チベット仏教人名辞典』(1973, 以下 BDTT) などに収められている記述等などがある。ただしこれらはいずれも彼らの事跡をごく簡単に提示するにとどまっている。

一方、ツォードゥクランドウルの『シャプカル自伝』(以下 ZhRN) は、本人の事跡を詳細に知りうるのに加え、他の3名に関する記事も、多数みえる。また、ジグメータンチョク ('Jigs med theg mchog) の『ロンウ・ゴンチエン寺誌』(1988, 以下 RGN) にも、彼らに関する記事がみえる。さらには、2000年から2004年にかけて、ガクマン・シリーズ (sNgag mang dpe tshogs) や『宝なる顯續の蔵』(以下 DGRDz) 等、彼ら自身の著作集が、利用しやすい形で相次いで刊行され<sup>(5)</sup>、彼らの思想や事跡についてより深く研究することが可能となった。

## 1.4 弘法事業

本節では、新たに刊行されたこれらの史料に基づき、彼らの事跡・弘法事業を概観する。

### ①リンジン・ホエデンタヒー (1688–1742)

出家者。1688年、レブコンのジャウ・チエチャ (rGya bo chu ca) で生まれた。18歳より23歳まで、現地のゲルク派のロンウ寺で教理を学び、25歳の時、ラサに赴き、デブン僧院に入った<sup>(6)</sup>。ここで4、5年間勉強したが、その間、病に倒れ、その際に守り本尊からの勧めを受けたこともあり、デブン僧院を離れ<sup>(7)</sup>、ニンマ派の名僧院ミントウルリン僧院、ドルジイタク僧院に入り、ニンマ派の教学の学修をはじめとして、「スルポーチェお三方」<sup>(8)</sup>の

## —18-9世紀アムド・レブコン地方におけるニンマ派の発展—

うちのスルチエンの化身であるガワン・クンガーソナム (*Ngag dbang Kun dga' bsod nams*) など、無宗派 (*Ris med*) 運動の大師たちから教えを受けて、評判となつた。48歳となつた1726年、故郷にもどり、全レブコン地方でニンマ派の弘法に取り組み、彼の教えをうけて、きわめて多数の行者たちが現れた。

ホエデンタヒーの伝記 (KGG) によれば、青海を主とするアムド各地の年中行事の「毎月10日に行われる持明集修 (*Rig 'dzin gdung sgrub*) の法会、月末の空行会供 (*mKha' 'gro tshogs 'kho*) の法会、年間の八大修部 (*sGrub chen bKa' brgyad*) など」は、彼の指導により創始されたものである<sup>(9)</sup>。1742年、暗殺されたとされる (KGG, 3)。シャプカルが「すべてのレブコンのラマの中で、レブコンの仏教にもつとも貢献したのはヒャル・カーデンジャムツオと、ホエデンタヒーである」 (KGG, 3) というのは、もつともであると思われる。

上記で提示したごとく、レブコンは行者で著名な土地であるが、レブコンの行者達はすべて、その師を遡ってたどっていくと、彼に行き着くのである。彼の著作については、何冊もあるとされるが、現在、出版されているのは、彼の自伝とグル、馬頭明王修持儀軌、吉祥天女の修法、聴聞録<sup>(10)</sup>などである。

近代以降、レブコンは、すぐれた学者を輩出したことを理由として、「黄金の郷」、「学問の郷」と美称されるようになつたが、彼はレブコンに関するこの種の観点に初めて反論した人物でもある。彼の自伝中には、レブコンに対する「田舎の中のド田舎」という評価や、「レブコンの住人は中途半端、漢人は漢人でなく、チベット人はチベット人でなく、モンゴル人もモンゴル人でない」という類の、珍しいコメントが散見されるのである<sup>(11)</sup>。

### ②ホエチン・ナムカージグメ (1687-1746)

彼に関する資料については、下記の写本がある。著者：ツォードゥクランドゥル  
書名：*Grub ba'i dbang phyug dpal chen nam mkha' 'jigs med mchog gi rnam par thar ba snying bor drill ba skal bzang thar par khrid pa'i ded dpon.*

備考：写本、約60葉（欠葉あり）。成立年不詳。個人所蔵の写本。複写は許されなかつたが、メモを取りながら読むことは許可された（2005年7月）。

この伝記によれば、ホエチン・ナムカージグメは1687年生まれ、1746年没。出身地はレブコン・チャンロン (*sPyang lun*)。レブコン・ガマンの寺院と道場の中で、彼の建立になるものが非常多。彼と同時代に活動したリンジン・ホエデンタヒーがレブコンガマンの祖として高く崇敬されるのと比べて、あまり重視されていないが、レブコン地方のニンマ派弘通を考える上で、彼の事績には見過ごすことのできない重要性がある。この伝記については別に分析の対象とする予定である。

### ③チェジエ・ナガンタルジエ (1740-1807)

行者。彼は、1740年、グシハンの子孫である河南右翼蒙旗の旗長の家に嫡子として生まれ、1772年第4代目の旗長となった。彼に関する伝記史料によれば、モンゴル、チベット、中国の三つの言語に習熟し (MSYG, 2)、仏教の修学についても、ニンマ派の教えに限らず、カダム派やゲルク派の多数の高僧を尋ねたとされる。

旗長となった1772年に、ジャムヤンシェバ二世ジグメーアンオウ (*Kun mkhyen 'Jigs med*

## —18-9世紀アムド・レプコン地方におけるニンマ派の発展—

dbang bo, 1728–1791) よりゲルク派の伝統的教学を繰り返し受け、1779年、中央チベットにおいて、パンченラマ六世ペルデンイェシェ (Pan chen dPal ldan ye shes, 1738–1780) と会見し、グシハンの子孫であることから、きわめて鄭重な出迎えをうけた。

彼はこの旅においてはじめてニンマ派の教えに接した。そのときの師は、ツンドゥ (brTson 'grus) とツェペ (Tshe 'phel) 二人である。彼は長い間子供が生まれなかつたが、ニンマの教えと接してからほどなく嫡男タシージョンネー (bKra shis 'byung gnas) に恵まれたことから、きわめて熱心にニンマの教えに取り組むようになり、ツェツク (rTse chu khug) のシンゲ (Seng nge) という土地にサンガクタルジエーラン (gSang sngag dar rgyas gling) という僧院を建立 (MSYG, 3) するまでになる。

1724年、清朝は青海に出兵し、グシハン一族の当時の長老格であったロサンテンジン (= ロブサン・ダンジン) を「反乱者」として攻撃し、グシハン一族のチベット支配体制を完全に覆した。いわゆる「ロブサンダンジンの乱」であるが、その戦乱の最中にサンガクタルジエーラン寺は潰されてしまった。

著作は、「マハヨーガの生起解説」、「アヌヨーガの脈・気の円満次第」、埋蔵經典などがあるとされるが、現在は亡佚している。現存するテキストとしては『馬頭・亥母如意珠のゾクチエンの修法次第・暗黒を取り除く智慧の灯明 (rta phag yid bzhin noru bu'i rdzogs chen gyi khrid rim ma rig mun pa sel ba'i ye shes sgron me)』(以下 MSYG) がある。アムド地方に馬頭 (rTa mgin) および亥母 (rDo rje phag mo) の修法をつたえたのは、彼の手によるものである (MSYG, 2)。

ゾクチエンの伝承によれば、彼はジグメーテンリーウーセル<sup>(12)</sup>の弟子の系譜の筆頭に位置し (VPh, 515)、著名な弟子としては、アムドにおいて「第二のミラレバ」と呼ばれたツォードウクランドゥルがある。

#### ④ツォードウクランドゥル (1781–1851)<sup>(13)</sup>

出家者。1781年、レプコンのシュンポン (Zho 'ong) に生まれる。10歳の時、レプコンの行者会に加わり、17歳の時、ランジャ (Gling rgya) のテンバーラブジイ (bsTan pa rab rgyas) よりタンカの描き方を学んだ。21歳の時、ラジャ僧院 (Ra rgya dgon、1769年建立) の創建者アーリクゲプシェ・シャンバーグラクジャンツエン (A rig dge bshes Byams pa dge legs rgyal mtshan, 1726–1803)<sup>(14)</sup>のもとで出家し、具足戒を授かった。ついでゾクチエンの伝承チェジエ・ナガンタルジエよりニンマの教えのすべてを受け、彼を根本師とした。26歳の時、全チベットを巡る旅にてて、各地の聖地で修行を行った。37歳の時、ネパールに出、48歳となった1829年にレプコンに戻った。

レプコンでは仏法を広め、衆生を利益する広範な活動に取り組んだ。多数の弟子があつたが、特に著名な者としてはペマ・ラントゥル (Pad ma rang grol)、カテン・ラントゥル (sKa ldan rang grol)、サンジィリンチエン (Sangs rgyas rin chen)、チャンロン・タクカル (lCang lun sprul sku) などがある。『雪域歴代名人辭典』(以下 GKhRM) によれば、著作は二十五秩あるとされる (GKhRM, 1471) が、ポタラ宮殿所蔵の『ニンマ派全集目録』(以下 NS) には、七秩しか挙がっていない (NS, 323–325)。そのうち四秩は写本である。著作の内容は、巡礼

## —18-9世紀アムド・レプコン地方におけるニンマ派の発展—

記をはじめ、グル（mGur）、本尊修持法、教訓などで、伝記・グルの『シャプカルパのナムグル』（ZhRN, --）が極めて有名である。

ゾクチェンの伝承によれば、彼はジグメーテンリーウーセルの弟子の系譜の第二番目に位置する（VPh, 515）。

⑤トゥプデンドルジイについては、次の2.2で詳述する。

## 小結

以上で検討した弘法者たちの事例をふまえ、チベット仏教史上におけるレプコン、ニンマ派の位置づけをあらためて考えてみたい。

吐蕃王朝はチベットという国家の枠組みをつくった政権である。この時代以降、チベット高原の住人たちは、王朝や政権の変遷を超えて、チベットという国家への帰属意識を保ち続ける。チベットの一体感を支える要に位置していたのが、この王朝の時代に成立したチベット語訳の仏典を基体とした仏教文化であった。

吐蕃王朝は、ヤルルン河流域におこり、中央チベットよりチベット高原を制覇した。レプコンは、チベット高原の東北方に位置し、唐王朝、西域、北宋、西夏、モンゴルなど諸民族との抗争の最前線に位置する辺境であり、中央チベットで生じた文化現象が波及するには、非常に時間を要した。

チベットにおける仏教の本格的弘通は7世紀より8世紀にかけてで、僧伽の設立、仏典翻訳の国家事業化などが着手されるが、東チベットに仏教信仰が波及するのは、中央チベットにおける破仏期をはさんで、さらに時代がくだる。

ニンマ派自体は、吐蕃時代以来の伝統を有する諸宗派の総称であるが、ニンマ派教団の組織化、僧院の建立が行われるのは16、17世紀<sup>(15)</sup>のことであり、アムド、レプコン地方にまでその教線が延びてくるのは18世紀までくだる。レプコン地方のニンマ派発展は、チベット全土におけるニンマの教団組織の強化の結果として生じた事態といえる。

ひとたびニンマ派の教線が及んで以降、レプコン地方はニンマ派的一大中心となった。アムド地方におけるニンマ派弘通史上、名だたる伝承師5人が相次いで現れ、多数の著作をものし、大きな影響を残した。また行者（sNgags pa）が多数活動している地方としても、名高い。チベット全体をみると、ニンマ派行者の数、道場の数において、レプコン・ガマンに匹敵するような地域は他にない。すなわち、チベット仏教圏全体を通じてみても、ニンマ派の発展は、16世紀にウツアンよりはじまり、東方へ、ついで東北方へ伝播した。その影響がレプコンに及んだのは17世紀から19世紀にかけてであり、この時期にレプコンガマンというニンマ派有数の教団を成立させ、その拡大、発展は20世紀にいたるまで続くのである。

## —18-9世紀アムド・レブコン地方におけるニンマ派の発展—

## 2 トゥブデンドルジイの事跡と思想

### 2.1 伝記資料について

ニンマ派に属する人々の事跡に関する資料は、他派と比較して次のような特徴がある。

ニンマ派は、元来、大僧院を擁し、一人の師匠に多くの弟子がつくというような組織形態ではなかったため、他派ならば、自伝のない場合でも、高弟たちによる伝記が残されている人物の例がよくみられるが、ニンマ派ではそのような事例がひじょうに少なく、大部の著作を残していくながら、事跡が定かではない人物が多数ある。そのため、ニンマ派では、宗派の思想的発展や、各地への布教において大きな足跡を残した重要人物でさえ、その事跡を研究しようとするにあたり、資料上の困難を覚えることがままみられる。例えば持明表示伝の第六代、シリーシンハは、パドマサンバヴァの師匠でもあるニンマ派の重要人物である<sup>(16)</sup>が、その伝記資料は残されていない。トゥブデンドルジイの場合も、まとまった伝記資料がないため、彼の事跡を考察するにあたっては、1章で利用したような資料群の断片的な記述より、探ってゆくほかはないのである。

トゥブデンドルジイも、伝記資料を欠く重要人物のひとりであり、彼の事績を解明するためには、彼と同郷で同時代に活躍した人物たちの著作や、かれらに関する資料の記述を利用してゆくことになる。

このような目的に用いることができる資料としては、1.3で紹介したごとく、伝統的形式で執筆された新旧の伝記がある。

### 2.2 伝記及び事跡

トゥブデンドルジイは、アムド地方レブコンの出身で、本名はコンオウヨンテン (Gong bo yon tan) と言う (DG, 332; 蒲文成 1989, 456)。1.3で言及した伝記史料群よりまとめた彼の事跡は以下のとおり。

生年は 1785 年で、没年については従来の研究では没年が不明だったが、最近目に入したクーデー・ゾクチエンナムジェーラン (Ko'u sde don rDzogs chen rnam rgyal gling) の寺史 (著者不詳, k'u sde don rdzogs chen rnam rgyal gling gyi gdan rabs, 成立年不詳。個人所蔵の写本で、2005 年 7 月、所蔵者の許可を得てメモをとりつつ閲覧した) によれば (5b)、「彼が 63 歳となった第 14 ラプチュンの戊申 (1848 年) に色体は法界に滲み行った (rab byung bcu bzhi ba'i sa pho sprel spyi lor gzugs sku'i bkod pa chos dbyings su bs dus so)」と書かれている。

また、彼の主著『宝なる顯續の蔵』(DGRDz) の脱稿年として、著者本人による「私が 54 歳となった戊戌 (rNam 'phyang, 1838) 年」という記述があり、また、ツォードゥクラン ドゥルの『自伝』(ZhRN) によれば、彼が 61 歳であった 1842 年に、トゥブデンドルジイより『宝なる顯續の蔵』の口伝「Lung」と教導「Khrid」を受けたとある (DGRDz1, 3-5) ので、少なくとも、57 歳の 1842 年まで存命であったことがわかる。

## —18-9世紀アムド・レプコン地方におけるニンマ派の発展—

以上の二史料の記述より、彼の没年が1848年であることが確認された。

幼い時は故郷のゲルク派寺院チュクチクヒエル僧院 (*bCu gcig shel gyi dgon*)<sup>(17)</sup>に入り、この僧院において律や別解脱戒、内菩薩戒、密秘真言戒と言う三檀大戒律を授かった。その後、アムドにおけるカダム派の最初の弘法拠点であるラジャ僧院に入り、ヒャンザパンディタ・ロブザンタルジェジャムツォ (*Shing bza' paNDita ta Blo bzang dar rgyas rgya mtsho*, 1759–1824) などのもとで三蔵、三学を5年ほど学んだ。そして、さまざまな場所を巡拝してそこで修行を続けた。その間に、本尊と護法神の予言が下り、ニンマ派、カギュ派、サキヤ派、ゲルク派の四大宗派のいずれもが栄えている土地として知られるカム地方デルゲ (*sDe dge*) の町へむかった。この地では、ニンマ派の碩学たちからニンマの教えをうけた。ゾクチエン僧院 (*rDzogs chen dgon pa*) では、同寺の座主のミンギュルナムカドルジイ<sup>(18)</sup>などに師事し、また当時のニンマ派の最高の碩学とされていたジグメーティンレーオーセル<sup>(19)</sup>のヤエロンペーマコ寺 (*Yar klong padma bkod*)<sup>(20)</sup>に長い間滞在し、彼から三種の内タントラ「*maha'ayoga*」、「*anuyoga*」、「*atiyoga*」を特に伝授され (VPh, 653)、彼から、「ロンчен・チェヤントウプデンドルジイ・マンパムショグレナンバルジェーワ」<sup>(21)</sup>という最高の栄誉の名前を授かり、自身と他のひとびとにより、チエヤン・トウプデンドルジイとして知られるようになり、ドードウプチエンの四大金剛弟子の一人に数えられる (VPh, 531)。

その後、ジグメーティンレーオーセルより、故郷レプコンに戻り、弘法に努めよといふ指示をうけ、故郷に帰還し、クーデー・ゾクチエンナムジェーラン僧院を建立（この寺は1958年に「民主改革」により破壊されるまで存在していた（蒲文成 1989, 456）、この寺を拠点に布教や学生の指導などの活動に従事し、代表作『宝なる顯續の蔵』(DGRDz) の執筆に取り組み、完成させた。

### 2.3 代表作『宝なる顯續の蔵』とその構成

トウプデンドルジイが著した『宝なる顯密の蔵』(DGRDz) は、チベット東北部のアムド地方で長らく伝存されてきた重要文献のひとつ (DG, 332; VPh, 653; 蒲文成 1989, 456; RGD, 549) である。原本はチベット伝統のペチャ形式で、13秩から成り、木版刷りによって開版出版された。原本刊行当時より、チベット全土で、とりわけニンマ派の中で、名著として高い評価を受けてきた。

1928年に中国国民政府がアムド地方に設置した青海省の主席に就任した馬歩芳（任1938–49）は、代理主席の地位について1937年より、この地方に戦乱を引き起こした。レプコン地方は1937年に劫略をうけ（崔永紅ほか, 1999）、その際、他の多くの文献とともに本書の版本も散逸してしまった (Nor sde 2000, 5)。

しかし、1984年、中国人民政府より「民族古籍整理重点項目」の指定と支援を受け、散逸した諸文献の復元の試みが開始され、本書も、各地に残存する断片の蒐集が行われて、全体の復元が可能となった。16年の編纂作業を経て、2000年、四川民族出版社より、全5冊の洋装活字本によって復刻版が刊行された。本書はトウプデンドルジイの代表作ではあるが、

## —18-9世紀アムド・レブコン地方におけるニンマ派の発展—

この著者には、その他にも守り本尊のリレクナクポ<sup>(22)</sup>関係の著作が多数あった。しかしながら、こちらについてはテキストの蒐集がはかばかしくなく、復刊の目処は全くたっていない。

本全集の内容は、大きく「顯（顯教）」と「續（密教）」とに大別される。復元された復刻版の構成は以下のとおりである。

## 具体的な例示

その構成は、他の文献にはみられない独特なもので、

## 目録「dkar chag」(Vol.1, 1-5)

- A 根本要義「rtsa ba」(本文) (Vol.1, 9-86)
- B 要約「bsdus don」(Vol.1, 89-164)
- C 字句解説「'bru 'grel」(Vol.1, 167-449)
- D 詳細な解説「rgyas 'grel」(Vol.2, 3-832; Vol.3, 3-503; Vol.4, 3-571)
- E 図解説明「dpe'u ris」(Vol.5, 1-381)

の六部で構成されている。要約以下の四部は、すべて根本要義部分に対する注釈である。

## 2.4 師資相伝及び彼の思想

ここでトゥプデンドルジイの思想を、彼に関わるラブジュ「Bla brgyud」と称される師資相伝を通して考察したい。

## 2.4.1 ジグメーランワの伝承

まず、ニンマ派で「甚深近伝（Nye brgyud zab mo）」といわれる初めの人物、18世紀の「遍知者ジグメーランワ（Kun mkhyen 'Jigs med gling ba, 1729-1798）」から見ることにする。彼は「遍知者ロンチエンパ（Kun mkhyen Klong chen pa, 1308-1363）」より三世紀も後の人物であるが、しかし、ニンマ派の数多くの文献では、ジグメーランワはロンチエンパのすべての伝承や教えの権威者として承認されているのである。さらに、彼は「遠伝（Ring brgyud）」・「近伝（Nye brgyud）」・「淨相伝（Zab mo dag snang gi brgyud pa）」という三つの伝承の保有者<sup>(23)</sup>としても承認されている。

なお、ジグメーランワの伝承の保有者として次の「弟子の4名のジグメー」という弟子たちがある。「弟子の4名のジグメー」

- ① ジグメーティンレーオーセルー（'Jigs med 'phrin las 'od zar, 1745-1822）
- ② タサラマ・ジグメージェウニウク（rTa zag bla ma 'Jigs med rgyal ba'i myu gu, 1765-1843）
- ③ モンラマ・ジグメーコンチュクナムジェ（Mon bla ma 'Jigs med dkon mchog rnam rgyal）
- ④ ギツィラマ・ジグメーオウセル（dGe rtse bla ma 'Jigs med 'od zer）

## —18-9世紀アムド・レブコン地方におけるニンマ派の発展—

## 「5名の化身」

彼が他界した1798年前後には、5名の化身が現れたことになる<sup>(24)</sup>。

- ① 身化身・ジャムヤン・チエンツィアンオウ ('Jam dbyangs mkhyen brtse dbang bo, 1820–1892)
- ② 語化身・ホイティ・ジグメチチアンオウ (dPal sprul 'Jigs med chos kyi dbang bo, 1808–1887)
- ③ 意化身・チエンツイ・イイシイドルジイ (mKhyen brtse ye shes rdo rje, 1800–1866)
- ④ 功徳化身・ミンギュル・ナムカドルジイ (rDzogs chen Mi 'gyur nam mkha' rdo rje, 1793–1870)
- ⑤ 事業化身・ジェセイ・シャンパンタイイ (rGyal sras gZhan phan 'tha' yas, 1800–?)

トゥプデンドルジイの最も重要な師2名のうち、ジグメーティンレーオーセルは「遍知者」ジグメーランワの「弟子のジグメーの4名」の首席にあたり、ゾクチエン四世ミンギュルナムカドルジエはジグメーランワの功徳化身にあたる。

ミンギュルナムカドルジエはジグメーランワの化身の一人に数えられるけれども、実際にジグメーランワが他界する以前に誕生した人物であり、その教えはジグメーティンレーオーセルから承受している。

## 2.4.2 ジグメーティンレーオーセルの根本伝承

また、ジグメーティンレーオーセルから始まる伝承としては「転生」と「弟子」という二つの伝承があり、トゥプデンドルジイは「弟子の伝承」に数えられる。そして本稿のレブコン地方におけるニンマ派の発展史で述べた5名のニンマ派弘法者のうち、チエジエ・ナガンタルジエとツォードウクランドゥルもジグメーティンレーオーセルの「弟子の伝承」に数えられるのである。

それらの伝承については、具体的には以下のとおりとなる。

## 「転生の伝承 (sPrul brgyud)」

- ① ジグメーティンレーオーセル
- ② 二世・ジグメープンツォジュンネイ ('Jigs med phun tshogs 'byung gnas, 1824–1863)
- ③ 三世・ジグメーテンビニュマ ('Jigs med bstan ba'i nyi ma, 1864–1926)
- ④ 四世・ジグメーティンレー ホウバレ ('Jigs med 'phrin las dpar 'bar, 1927–現在)

## 「弟子の伝承 (sLob brgyud)」

- ① チエジエ・ナガンタルジエ
- ② ツォードウクランドゥル
- ③ チャブゴム・ペマジャムツォ (sKyab mgon Padma rgya mtsho, 1829–1890?)

## —18-9世紀アムド・レブコン地方におけるニンマ派の発展—

- ④ ディカ・チニュサンモ (D'kaki chos nyid bzang mo, 1865-1953)  
 (以下省略)

## 2.4.3 ジグメーティンレーオーセルの支分伝承

ここで支分伝承というのは、ジグメーティンレーオーセルの最も重要な伝承保有者を指し、ドルジイの4名の弟子からなる。

- ① チャンツイ・イシドルジイ
- ② ジエセイ・ロプペドルジイ (rGyal sras rol bai rdo rje)
- ③ トウプデンドルジイ
- ④ リパ・タムツウドルジイ (Ras pa dam tshig rdo rje)

## 2.5 トウプデンドルジイの思想の由来

トウプデンドルジイの思想の由来については、本来なら、彼の最も重要な師であるジグメーティンレーオーセルについて詳しく調べるべきであろうし、ジグメーティンレーオーセルとジグメーランワとの関係や、彼らの伝記文献などを分析して探求することが理想的ではあるが、本稿では、資料上の制約により、師資相伝の系譜の分析という項目一点のみから、考察するものとした。

ニンマ派では、その起源を吐蕃王朝時代のパドマサンヴァバに求めているが、王朝時代以来のふるい伝承やテキスト (=ニンマ) を集成し、一つの宗派としての体裁をととのえたのは、14世紀にあらわれたロンチェンパである。彼と、その300年後にあらわれたジグメーランワは、ニンマ派内部で、それぞれ「第一遍知者」(Kun mkhyen dang bo)、「第二遍知者」(Kun mkhyen gnyis pa) として敬われている。この300年間の空隙にもかかわらず、ニンマ派では、ジグメーランワこそがロンチェンパの権威をもつともよく受け継いでいるとみなされている。すなわち、トウプデンドルジイの思想の由来を探るにあたっては、ジグメーランワにさかのぼる必要があることになる。

## 小結

ジグメーランワからの各種の伝承を改めて要約するなら、以下のとおりである。

- ① トウプデンドルジイの最も重要な師であるジグメーティンレーオーセルはジグメーランワの「弟子の伝承」に数えられている。
- ② トウプデンドルジイにとってジグメーティンレーオーセルに次いで重要な師であるミンギュルナムカドルジイは、ジグメーランワの「化身の伝承」に数えられているが、実際にはジグメリンパが没する以前に生まれており、ニンマの教えはジグメーティンレー

## —18-9世紀アムド・レブコン地方におけるニンマ派の発展—

オーセルより受けている。ゆえに彼はトウプデンドルジイの師であると同時に、ともにジグメーティンレーオーセルの弟子でもあるといえる。

- ③ 本稿において、一貫してその著作を利用してきたホイティ・ジグメチチアンオウもまた、ジグメーランワの「化身の伝承」の一人に数えられている。しかし、重要概念に対する用語や表記法より見た場合には、ジグメーティンレーオーセルの系統に属するトウプデンドルジイとは異なる用語や概念を多数用いる人物であることが明らかとなった。
- ④ 本稿の舞台であるレブコンのニンマ派に関わる5名の弘法者のうち、チエジエ・ナガントルジエ、ツォードウクランドゥルの2名は、ジグメーティンレーオーセルの「根本伝承」のうち、「弟子伝承」の第1と第2に数えられる。またトウプデンドルジイはジグメーティンレーオーセルの「支分伝承」の「弟子伝承」の筆頭に数えられる。

以上より、レブコン地方におけるニンマ派の発展は、すべてジグメーティンレーオーセルの系統によって担われてきたといえる。

トウプデンドルジイはジグメーティンレーオーセルの弟子であり、またもう一人の師ミンギュルナムカドルジエは、ジグメーティンレーオーセルに師事した人物である。ゆえにトウプデンドルジイの思想はジグメーティンレーオーセルに由来するものであり、さらにさかのばればその源は「甚深近伝」の最初の人物であるジグメーランワにまで行き着くのである。

## おわりに

ニンマ派では、以上に明らかにした、師資相伝の種々の系譜から、様々に異なる用語表記や術語の解釈が多数現れたものと思われる。従来より、ニンマ派では、ひとりの人物が、複数の異なる伝承を受け継ぐことや、一つの教えを受け継ぐ、系統の異なる伝承の系譜が併存するなどの状況が、頻繁に観察されるのである。例えば、「タントラ部」に属するニンマ派の重要な文献「幻化網 (sGyu 'phrul drwa ba)」だけでも、「共通のもの (thun mong pa)」 = 「スル流 (Zur lugs)」、「共通でないもの (thun mong ma yin pa)」 = 「ロン流 (Rong lugs)」、「全く共通でないもの (shin tu thun mong ma yin pa)」 = 「ロンченパ流 (Klong chen pa lugs)」という三つの流儀があり、それらの違いはインド密教や中国禪の両者の影響をどのように受けたかを反映するものであるという研究も存在する<sup>(25)</sup>。

今後の課題としては、主として以下の項目を予定している。

第一に、アムド・ゴーロク (mGo log) におけるニンマ派の発展について。ゴーロクは、レブコンと同様、チベット全土におけるニンマ派の教団組織の強化の中で、規模と質の両面におけるニンマ派の大発展が見られた。1857年に建立されたタルタン僧院 (Dar thang dgon pa) を中心とした歴代のラツウ (lHa sprul) や歴代のチュクツウ (mChog sprul) の動静に焦点をあてて、この地のニンマ派の発展について考察してゆきたい。

第二に、ガーグ (rNga khog) およびジェロン (rGyal rong) におけるニンマ派の展開について。これらの地域は、吐蕃時代の大訳師ベルチャーナが滞在し、古くからニンマ派を伝えってきた地で、アムドではニンマ派の寺院が最も集中した地である。この地のニンマ派の信仰

## —18-9世紀アムド・レブコン地方におけるニンマ派の発展—

形態には、チベット独自の宗教であるボン教との混淆が見られるという特徴がある。特にニンマ派とボン教の相互影響を中心として、この地におけるニンマ派の発展について考察していく予定である。

## 略号表

- BDTT mKhas btsun bzang po, 1973.
- DChG mKhas pa lde'u (12世紀). *lDe'u chos 'byung rgyas pa* (12世紀頃). 使用刊本: mKhas pa lde'u (賢者弟吾). *mKhas pa de'us mdzad pa'i rgya bod kyi chos 'byung rgyas pa* (弟吾宗教源流). Ed. Chab spel tshe brtan phun thogs (恰白・次旦平措). IHa sa (拉薩): Bod ljongs mi dmangs dpe skrun khang (西藏人民出版社), 1987.
- DG Brag dgon pa dKon mchog bstan pa rab rgyas (1801-1866). *Yul mdo smad kyi ljongs su thub bstan rin po che ji ltar ba'i tshul gsal bar brjod pa deb t her rgya mtsho* (1865). 使用刊本: Brag dgon pa dKon mchog bstan pa rab rgyas (智貢巴・貢去乎丹巴堯布傑). *mDo smad chos 'byung* (安多政教史). Ed. sMon lam rgya mthso (毛蘭木嘉措). Lan kro'u (蘭州): Kan su'u mi rigs dpe skrun khang (甘肅民族出版社), 1982.
- DGRDz1-5 Klong chen Chos dbyings stobs ldan rdo rje (1785-1848). *mDo rgyud rin po che'i mdzod ces bya ba'i bstan bcos* (1838). 使用刊本: Klong chen chos dbyings stobs ldan rdo rje (隆欽闕英父丹多吉). *mDo rgyud rin po che'i mdzod ces bya ba'i bstan bco* (顯密文庫), 5vols. Kgreng tu'u (成都): Si khron mi rigs dpe skurn khang (四川民族出版社), 2000.
- DKhN mDo mkhen brtse Ye shes rdo rje (1800-1866). *mDo mkhen brtse ye shes rdo rje'i rnam thar*. 使用刊本: mDo mkhen brtse Ye shes rdo rje (多欽則益西多吉). *mDo mkhen brtse ye shes rdo rje'i rnam thar* (多欽則伝). Ed. Bkra shis (扎西). Kgreng tu'u (成都): Si khron mi rigs dpe skurn khang (四川民族出版社), 1997.
- DS dBal mang dKon mchog rgyal mtshan (1764-1853). *bDen gtam snying rje'i rol mtsho las zur du byung ba sa rnying bka' brgud sogs kyi khyad bar 'go smos tsham mu to'i rgyangs 'bod kyi tshul du bya gtong snyan sgron bdud rtsi'i bsang gtor*. 使用刊本: GPh, pp.647-743.
- DTh2 Ye shes rdo rje 2002.
- DTshCh Dung dkar blo bzang 'phrin las 2002.
- DzRK Khun chen Klong chen rab 'byams (1308-1363). *rDzogs pa chen po sems nnyid rang grol ; chos nyid rang grol ; mnyam nyid rang grol bcas rang grol skor gsum bzhugs so* (14世紀). 使用刊本: rGyal ba klong chen pa (龍欽巴). *rDzogs pa chen po rang grol skor gsum* (大圓滿三自解脱論). 台北、大藏文化出版社、1995。チベット語テキストのほか、法護による中国語訳も併収。
- GKhRM Ko zhul grags pa 'byung gnas and rGyal ba blo bzang mkhas grub 1992.
- GPh Rin chen tshe ring (仁青才讓) 編. *dGag lan phyogs bsgrigs* (辯論文選集). Kgreng tu'u (成都): Si khron mi rigs dpe skurn khang (四川民族出版社), 1997.
- KGG Rig 'dzin dPal ldan bkra shis (1688-1742). *Rang rnam rin po che'i do shal skal ldan mgul ba'i rgyan phreng*. PKS, pp.1-31.

## —18-9世紀アムド・レプコン地方におけるニンマ派の発展—

- KS Shar sKal ldan rgya mtsho (1607–1677). *mDo smad sgrub brygud bstan pa'i shing rta chen po phyag na padmo yab rje bla ma skal ldan rgya mtsho'i gsung 'bum*. 使用刊本: *Yab rje bla ma skal ldan rgya mtshoi gsum 'bum* (夏爾嘎丹嘉措文集). Eds. Dge 'dun blo bzang (更登羅桑), Blo bzang dar rgyas (羅桑達傑), Phun tshogs (鵬措). 5vols. Lan kro'u (蘭州): Kan su'u mi rigs dpe skrun khang (甘肅民族出版社), 1999.
- MSYG Chos rgyal Ngag dbang dar rgyas (1740–1807). *rTa phag yid bzhin noru bu'i rdzogs chen gyi khrid rim ma rig mun pa sel ba'i ye shes sgron me*. 使用刊本: Ngag dbang dar rgyas (阿旺達爾基). *rDzogs chen ma rig mun sel*. (阿旺達爾基文集). Eds. lCe nag tshang Hum chen (荒奔) and Nyi zla he ru ka (尼達). (*Snags man dpe tshogs*; 2). Pe cin (北京): Mi rigs dpe skrun khan (民族出版社), 2002.
- NS 編著者名・刊行年不詳. *rNying ma'i gsung 'bum*. 中国において「内部資料」として編纂、発行された文献で、奥付を欠き、著者・出版元・刊行年は不明。*sNgon 'gro'i gtam* には、ポタラ宮殿所蔵の版本を収録対象としたとある。
- PKS Rig 'dzin dPal ldan bkra shis (1688–1742). *Rig 'dzin chen mo dpal ldan bkra shis kyi gsung rtsom phyogs bsgrigs*. 使用刊本: Rig 'dzin Dpal ldan bkra shis (仁增華丹扎西). *Rig 'dzin chen mo dpal ldan bkra shis kyi gsung rtsom phyogs bsgrigs* (仁增華丹扎西文集). Eds. lCe nag tshang Hum chen (荒奔) and Nyi zla he ru ka (尼達). Pe cin (北京): Mi rigs dpe skrun khan (民族出版社), 2002.
- RGD 'Jigs med theg mchog. *mDo smad bstan pa'i gmas gzhi rong bo dpal gyi dgon chen phyog thams cad las rnam par rgyal ba bde chen chos 'khor gling gtso byas ba'i chos dar tshul ches long tsam brjod pa rdzog ldan gtam gyi rang sgra* (1988). 使用刊本: 'Jigs med theg mchog (吉邁特却). *Rong bo dgon chen gyi gdan rabs rdzogs ldan gtam gyi rang sgra* (隆務寺志). Ed. Grags pa (智華). Zi ling (西寧): mTsho sngon mi rigs dpe skurun khang (青海民族出版社), 1988.
- TshL Sum pa Ye shes dpal 'byor (1704–1788). *mTsho sngon gyi lo rgyus* (1787). 使用刊本: Sum pa ye shes dpal 'byor (松巴・葉西華角). *mTsho sngon gyi lo rgyus bkod pa'i tshangs glu gsar snyan* (青海歴史). Zi ling (西寧): mTsho sngon mi rigs dpe skurun khang (青海民族出版社), 1982.
- TsNM dGa' rab rdo rje. *Tshig gsum gnad du brdeg pa'i man ngag*. 使用刊本: dGa' rab rdo rje (嘎拉多傑). *Tshig gsum gnad du brdeg pa'i man ngag* (椎擊三要口訣). 台北、大藏文化出版社、2003。チベット語テキストと法護による中国語訳注とを併収。底本は北京・民族図書館所蔵の版本とある。
- VPh sNyin zhu mkhan po 'Jam dbyangs rdo rje. *Rang bzhin rdzogs pa chen po'i chos 'byung rig 'dzin brygud pa'i rnam thar ngo mtshar nor bu beeD'uraya'i phreng ba* (1998). 使用刊本: 中文訳注。紐修堪仁波切蔣揚多傑著・堪布耶謝桑波訳『大圓滿傳承源流・藍寶石』上・下、台北、全佛文化有限公司、2002。
- ZhRN Zhabs dkar pa tshogs drug rang grol (1781–1851). *sNyigs dus 'gro bo yongs kyi skyas mgon zhabs dkar rdo rje 'chang chen po'i rnam par thar pa rgyas par bshad pa skal bzang gdul bya thar 'dod rnams kyi re ba skong ba'i yid bzhin gyi nor bu bsam 'phel dbang gi rgyal bo*. 使用刊本: zhabs dkar pa (夏嘎巴). *Zhabs dkar pa'i rnam thar* (夏嘎巴伝). Ed. bKra shis rab brtan (扎西拉旦). stod cha (上), smad cha (下). Zi ling (西寧): mTsho sngon mi rigs dpe skurun khang (青海民族出版社), 1985–1986.

—18-9世紀アムド・レプコン地方におけるニンマ派の発展—

文献表

チベット語

Ko zhul grags pa 'byung gnas (郭須・扎巴軍乃) and rGyal ba blo bzang mkhas grub (嘉娃・羅桑開珠), eds.

1992 *Gangs can mkhas grub rim byon ming mdzod* (雪域歴代人名辞典). Ian kro'u (蘭州): Kan su'u mi rigs de skrun khang (甘肅民族出版社).

mKhas btsun bzang po

1973 *sNga 'gyur rnying ma ba'i bla ma brgyud pa rjes 'brangs dang bcas pa'i rnam thar ngo mtshar rgya mtsho* (Biographical Dictionary of Tibet and Tibetan Buddhism). 11vols. Dharamsala, India: Library of Tibetan Works and Archives, 1973-1979.

Dung dkar blo bzang 'phrin las (東噶・洛桑赤列)

2002 *mDung dkar tshig mdzod chen mo* (東噶藏学大辞典). Pe cin (北京): Krung go'i bod rig pa dpe skrun khang (中国藏学出版社).

rDo brag dGe 'dun chos 'pel

1988 *mKhas dbang dge 'dun chos 'pel gyi gsung rtaom phyogs sgrig* (根敦群培文選). Khrong tu'u (成都): Si khron mi rigs dpe skrun khang (四川民族出版社).

Nor sde

2000 *Chos dbyings stobs ldan rdo rje'i rnam thar rags bs dus*, DGRDz-1, 5.

Mi rigs dpe mdyod khang (民族図書館)

1984 *Bod gangs can gyi grub mtha' ris med kyi mkhas dbang brgya dang brgyad cu lhag gi gsung 'bum su su'i dkar chag phyogs gcig tu bsgrigs pa shes bya'i gter mdzod* (藏文典籍目録文集類子目). stod cha (上). Khrong tu'u (成都): Si khron mi rigs dpe skrun khang (四川民族出版社).

1989 *Bod gangs can gyi grub mtha' ris med kyi mkhas dbang brgya dang brgyad cu lhag gi gsung 'bum su su'i dkar chag phyogs gcig tu bsgrigs pa shes bya'i gter mdzod* (藏文典籍目録文集類子目). bar cha (中). Pe cin (北京): Mi rigs dpe skrun khan (民族出版社).

dMu dge bSam gtan rgya mtsho (毛児蓋・桑木丹, 1914-1993)

1997 *rJe dmu dge bsam gtan rgya mtsho'i gsum 'bum* (*rje dmu dge bsam gtan rgya mtsho mi 'jigs dbyangs can dga' ba'i blo gros dpal bzang bo'i gsung 'bum*, (毛児蓋・桑木丹全集). vol.3 (第三卷). Zi ling (西寧): mTsho sngon mi rigs dpe skrun khang (青海民族出版社).

Ye shes rdo rjeo (楊貴明)

—18-9世紀アムド・レブコン地方におけるニンマ派の発展—

- 2002 *Gangs can mkhas dbang rim byon gyi rnam thar mdor bsdus bdud rtsi'i thigs phreng* (歴代藏族学者小伝). vol. 2. Pe cin (北京): Krung go'i bod kyi shes rig dpe skrun khang (中国藏学出版社).

その他の諸言語

稻葉正就

- 1961 「チベット佛教史の研究」『日本西藏学会々報』8号、pp.1-3。

金子英一

- 1982 『古タントラ全集解題目録』国書刊行会。

尕藏加 (sKal bzang rgyal)

- 2002 『吐蕃佛教——寧瑪派前史與密宗傳承研究』北京・宗教文化出版社。

崔永紅・張得祖・杜常順

- 1999 『青海通史』西寧・青海人民出版社。

佐藤長

- 1978 『チベット歴史地理研究』岩波書店。

- 1986 『中世チベット史研究』同朋舎。

謝啓晃・李双劍・丹珠昂奔 編

- 1993 『藏族傳統文化辭典』蘭州・甘肅民出版社。

杜永彬

- 1994 学位論文『西藏人文主義先駆者更敦群培大師評伝』台北、蒙藏委員会。

長尾雅人・井筒俊彦・福永光司・上山春平・服部正明・梶山雄一・高崎直道 編

- 1989 『チベット仏教』(岩波講座・東洋思想第11巻) 岩波書店。

平松敏雄

- 1982 『西藏仏教宗義研究』第三巻: トウカン『一切宗義』ニンマ派の章、東洋文庫。

- 1989 「ニンマ派と中国禪」『チベット仏教』(岩波講座・東洋思想第11巻)、岩波書店、pp.263-287。

蒲文成

- 1989 『甘青藏傳佛教寺院』西寧、青海人民出版社。

—18-9世紀アムド・レブコン地方におけるニンマ派の発展—

楊麒麟

2003 『西藏佛教寺廟』成都、四川人民出版社。

山口瑞鳳

1982 「カダム派の典籍と教義」『東洋学術研究』21-2、pp.68-80。

1987 『チベット』(上)、東京大学出版社。

Dargyay, E. M.

1977 *The Rise of Esoteric Buddhism in Tibet*. Delhi : Motilal Banarsidas.

'Gos Lo tsa ba gZhon nu dpal.

1949-53 *The Blue Annals*. 2vols. Tr. Roerich, G. N. Calcutta : Royal Society of Bengal.

Karmay, Samten G.

1988 *The Great Perfection (Rdzogs chen)*. Leiden: E.J.Brill.

Stein, R. A.

1962 *La Civilisation tibétaine*. Paris: Dunod.

1972 *Tibetan Civilization*. Tr. Stapleton Driver. J.E. London : Faber and Faber.

Tucci, G and Heissig, W.

1970 *Die Religionen Tibets und der Mongolei*. Stuttgart : W. Kolhammer.

Tucci, G.

1980 *The Religions of Tibet*. Tr. Geoffrey Samuel. London : Routledge and Kegan Paul.

Tarthang Tulku.

1972 *A History of the Buddhist Dharma-Crystal mirror*, Vol. 5. Tr. Lawrence Gruber. Eds. Robertson, J and Black, D. Berkeley : Dharma Press.

Tuku Thondup

2005 『大円満龍欽寧体伝承祖師伝』図登華丹訳、台北、寧瑪巴喇榮三乗佛学会出版社。

注

(1) 杜永彬 1994。

(2) Chos rgyal ngag gi dbang po とも表記 (VPh, 551)。

## —18-9世紀アムド・レブコン地方におけるニンマ派の発展—

- (3) チベット東北部のレブコン地方を中心に成立した、在家者を中心としたニンマ派の一大教団。チベット仏教の他の宗派と比して、ニンマ派は在家者中心とする傾向を有するが、この地域は特にその傾向が強い。現在の中国による行政区画で、青海省の黄南藏族自治州を構成する同仁(Thun rin)、チエンツア(gCan tsha)、ツェコク(rTse khog)、ソクデ(Sog sde)の四県と、同省海東地区の化隆盛回族自治县、撒拉回族自治县、海南藏族自治州の同徳県、甘肅省甘南藏族自治州の西部などに相当。
- (4) コロフォンには「私が65歳となった木牛年(shing glang lo, 甲丑の年)に書かれた」とあることから、1865年の成立であることがわかる(DG, 783)。
- (5) 例えばDGRDz(→略号表参照)、MSYGなど。
- (6) rang gi spun zla dge slong gis de gar sdod cig zer ba dang ma gzhi'i rkyen shig la'ng brten nas chos sde chen po dpal ldan 'bras spungs su grawa tshang khag mthon bzhi yod pa'i nang nas rang re'i thob khungs bka shis sgo mang ba'i 'grigs lam la shugs so / (KGG, 12)
- (7) skabs zhig lus la sib bu'i nad kyi gtser ba dang grawa ba kha shas kyi bya spyod la brten nas rang la rang yi mug cing gnas chung dang dga' gdong chos skyong sogs la bstag pa shus / ..... rkyen de dag la brten grawa sa nas thon ste / (KGG, 13-14)
- (8) Zur chen shakya 'byung gnas(1002-1062)、Zur chung shes rab grags pa(1014-1074)、sGro phug pa shakya seng ge(1074-1134)の三名を指す。
- (9) 'jig rten bde shing skyid pa la // o rgyan tshes bcu bsngags pa yin // de phyir tshes bcu e tshugs bsam // yul gru 'ga' la btsugs pa yin // mtha' dmag 'khrug rtsod bzlog pa la // bka' brgyad khro rol bsngags pa yin // de phyir bka' brgyad e tshugs bsam // sngags sde 'ga' la btsugs pa yin // phyir ma'i thar lam myur ba la // man ngag lta ba rdzogs chen bsngags // de phyir skal ldan 'ga' zhig la // zab lam snying thig khrid pa yin // (KGG, 2)
- (10) グル(Mgur)、馬頭明王修持儀軌(khro rgyal rta mchog rol ba gsang sgrub kyi gtor bzlog bgags dpung mthar byed/)、聴聞録(gsan yig)(PKS, 277-317)。
- (11) mtha' 'khob kyi nang nas yang 'khob rgya min bod min rgya hor la sogs pa sna tshogs 'dres pa'i sa cha zhig tu yod do / (KGG, 9)
- (12) ドードウプチエン1世ジグメーティンレーオーセルー(rDo grub chen 'Jigs med 'phrin las 'od zar)、1745-1822。事績の詳細については、VPh(528-533)を参照。
- (13) 事績の詳細については、VPh(553-555)を参照。
- (14) 別名、A rig dge bshes Byams pa 'od zer(DTshCh, 2194)。
- (15) ニンマ派6大僧院の建立年代: 1. カトゥ寺(Ka thog dgon pa, 12世紀。最も由緒あるこの僧院は、建立自体は古いが、僧院としての規模を有するようになったのは17世紀からである) 2. ドルジイタク寺(rDo rje brag, 16世紀末) 3. パルユ寺(dPal yul dgon pa, 1675) 4. メントゥルラン寺(sMin grol gling, 1676) 5. ゾクチエン寺(rDzogs chen dgon pa, 1680) 6. シチエン寺(Zhe chen dgon pa, 18世紀)。
- (16) 生没年など詳細な事績は不詳。「持明表示伝」はニンマの三大伝承の一つで、中国人であったとされる(DGRDz4, 13)。ニンマ派への中国禪の影響はこの人物によってもたらされた可能性もある。
- (17) レブコンでは著名な寺院で、ロンウ・ゴンチエン寺の初期の18の末寺のひとつ(蒲文成1989, 447)。
- (18) Mi 'gyur nam mkha' rdo rje, 1793-1870. DGRDz2(301-310)を参照。

—18-9世紀アムド・レブコン地方におけるニンマ派の発展—

- (19) 注12を参照。
- (20) DTshCh (1156) には、1810年、ドードウプチエンによりヤロンペーマコが建てられたとある。  
またDKhN (75) にもヤロンペーマコに関する記事がある。
- (21) 法性深奥にして四方に勝利せる神力金剛 (Klong chen Chos dbyings sTobs ldan rdo rje Ma pham Phyogs las rnam par rgyal ba)。
- (22) drag sngags lag len gyi skor mnan pa'i las mtha' ri rab nag po. (DGRDz1, 4)
- (23) VPh (359) をはじめ、ニンマ派関係の多くの文献で同様の記事がみられる。
- (24) 以下はVPh (359) による。Tuku Thondup は次のように比定しており、異同がみられる。身化身・チェンツィ・イイシイドルジイ (Tuku Thondup 2005, 246)。語化身・ホイティ・ジグメチイチアンオウ (Tuku Thondup 2005, 274)。意化身・ジャムヤン・チェンチイアンオウ (Tuku Thondup 2005, 292)。
- (25) 例えば、平松1989。